Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Frédéric Worms, ”Bergson ou les deux sens de la vie”, Presses Universitaires de France, 2004
Author(s)	木村, 淳
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 205-209
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5409
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

◇書　評◇

Frédéric Worms, Bergson ou les deux sens de la vie, Presses Universitaires de France, 2004

木村　淳

本題に入る前に、『ベルクソン、あるいは生の二つの意味』*Bergson ou les deux sens de la vie*, 2004）の著者であるフレデリック・ヴォルムスについて紹介しておきたい。現在、彼はリール第三大学で現代哲学史教授として教壇に立つ傍ら、パリのエコール・ノルマルにある現代フランス哲学研究国際センターのセンター長、ベルクソン学会会長をもつとめている。研究領域は20世紀フランス哲学であるが、とくにベルクソン研究において数々のすぐれた業績がある。以下に、彼の業績をいくつか挙げておこう。

ベルクソン研究に関して、彼の代表的な業績を列挙するなら、彼が監修をつとめ、エピメテから刊行された『ベルクソン年鑑』（*Annales bergsoniennes*, 2002）がある。この著作はベルクソンのテクストや未刊の講義録、諸々の研究から成っており、当時のさまざまな知的状況のなかで、ベルクソンがどのように位置づけられるのかということについて理解が深まるだろう。また、当時の政治的、社会的状況を踏まえつつ、ベルクソンの生きた時代をフィリップ・スーレーズとの共著で、『ベルクソン、伝記』（*Bergson, biographie*, 2002）を刊行している。その他、難解な『物質と記憶』を緻密に論じている『ベルクソンの［物質と記憶］入門』（*Introduction à la Matière et mémoire de Bergson*, 1997）や、ベルクソンの著作を読む場合に手助けとなる『ベルクソン用語集』（*Le vocabulaire de Bergson*, 2000）がある。その他、哲学史研究において彼が監修をつとめた『哲学における1900年という時代』（*Le moment en philosophie*, 2004）がある。この著作は1900年前後の時期に世にでた、

フッサールやフロイト、ベルクソン、ラッセル、デュルケーム等の著作のあいだに共有される問題意識、彼らの共通性と違いが論じられている。以上の業績からわかるとおり、ベルクソン研究を中心に、1900年前後の知的状況を踏まえた研究が見られることから、ヴォルムスはベルクソンの生きた時代の哲学史家と言っても良いだろう。

本稿で扱う『ベルクソン、あるいは生の二つの意味』は、ベルクソンの四大主著である『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』1889）、『物質と記憶』（1896）、『創造的進化』（1907）、『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』1932）を年代順に、「生の二つの意味」という観点から論じており、上に挙げた著作を含む、これまでの彼のベルクソン研究の集大成といっても良いような著作である。本書を一言で概括するならば、『試論』から『二源泉』に至るまでの、ベルクソン哲学の拡がりとその統一を論じるのが主たる目的である。その際、ベルクソンの思考の起源とその拡がり、彼の著作を読む際に強いられるベルクソンの方法とその変遷、彼の哲学の哲学史上の位置づけなど、内容は多岐にわたっている。こうした個々のテーマは、別々に併置されて論じられるのではなく、それぞれが密接に絡み合って、ベルクソン哲学全体としての統一を見事に提示している。しかしその反面、全体としての統一を論じるにあたって、これら個々のテーマそれ自体の深淵さを取り逃しているような印象を受けるのも事実である。したがって本稿では、『試論』で持続と空間との二元論が提示され、『物質と記憶』でこの精神と物質の二元性で語られ、『創造的進化』でその統一が論じられ、『二源泉』でまた二元論にもどるという、ヴォルムスが描くベルクソン哲学の変遷をここで示すということはしない。むしろ本稿では二つの論点にしぼって本書におけるヴォルムスの特異性を示したい。一つは彼が立てた仮説、つまり「生の二つの意味」の意味であり、もう一つはヴォルムスが「拡張運動」と「緊縮運動」と呼ぶ、ベルクソン哲学全体の二つの意味である。大きくこの二つの論点が、本書におけるヴォルムスのベルクソン哲学に対するスタンスを端的に示すことになるだろう。

ベルクソン哲学に接する際、一元論をとるのか二元論をとるのかという問いが立てられるだろう。『試論』で論じられる動的な持続と、静的な空間という概念、物質と記憶、知性と本能、閉じた社会と開いた社会など、ベルクソン哲学におけるこうした概念に対して、二元論的な立場がとられることが多いし、また『創造的進化』において方法としての直観によって二元論が克服されるのだとして、一元論の立場がとられることも多い。しかしながら、ヴォルムスはこうした議論を踏まえつつも、この種の二元論や一元論を主張することはない。まず彼は、ベルクソンがいつも「われわれにとっての経験」にかえってくることに注目する。上に挙げた諸概念を大きく持続の側と空間の側に分けて言えば、持続と空間がなければ、「われわれにとっての経験」は成立しないというのがヴォルムスの一つの主張である。しかしまた、ベルクソン自身がよく、点をいくら集めても動きを再構成することはできないが、その逆は可能であるといっ

ているように、空間の側に身をおいて持続を捉えることはできない。だからベルクソンは持続の側に身をおいて、各著作の議論を二元論的に展開しているように読める。しかしヴォルムスはこのような二元論をたてるようなことはしない。彼によれば、ベルクソンは持続や開かれた社会に一挙に身を移すことで、無媒介的に持続の側とは対立するような、空間や閉じた社会といった、両者の相対立する概念がはっきり表れるのだと解釈される。このヴォルムスが立てる二元論は方法論の観点から主に取り上げられるだろう。こうしたことから、ヴォルムスは「われわれにとっての経験」に重きをおく限りでは、二元論は主張しないのであるが、方法論的観点からは二元論の立場をとっている。彼のこのベルクソンに対するスタンスを踏まえたうえで「生の二つの意味」についてみていきたい。

一般的にベルクソン哲学において、生という言葉は非常に広い意味で使われている。実際、それは生が表象不可能な持続の側で論じられており、その持続という語は生あるものを指して使われるか、あるいは宇宙の持続を指して使われているのである。これに対して、ヴォルムスが「われわれ一人ひとりに、生の二つの様式、二つの生き方がある」(p.8)と言っているように、彼の言う生とは、あくまでわれわれ一人ひとりにとっての生であり、ベルクソンのいう生と比べるとかなり限定された意味で使われていることが多い。では、彼がこのように、「われわれ一人ひとりにとっての」という、限定された意味で生という場合、そこにどのような意味があるのだろうか。

ここではヴォルムスが第一章で扱っている『試論』から、彼の議論を示したい。この著作では、質と量、持続と空間が論じられているが、これらはベルクソンが言っているように自由の問題を解決する手引きとしてもち出した概念である(O. p.3)。よく言われているように、『試論』において、これらの概念は終始二元論であり、自由の問題も持続の側で論じることで解決されている。ベルクソンにとって、J.S.ミルといったこれまでの自由の議論は、既成の不動な概念を用いている。決定論者の反対者でさえ、こうした概念を使って自由を論じるかぎり、決定論者とされる。こうした意味で、自由は空間の側で語られず、空間を否定的に語ることで、表象不可能だが実在する自由を持続の側で論じるのである。このように読むかぎりでは、ベルクソンが持続に重きをおいていることになる。しかしヴォルムスは、このように単純な二元論で『試論』を読むことはしない。もちろんベルクソンが持続と空間を区分していることは肯定する。しかし、どちらか一方に重きをおくということはしない。彼は、われわれ一人ひとりにとっての生という観点から持続と空間に着目し、それぞれを生の一つの側面として捉えようとするのである。

『試論』の序文の中からヴォルムスは次の文を引用している。「われわれは自分を表現するのに言葉に頼らざるをえないし、たいていの場合空間のなかで考えている」。これは「実生活では有用であるし、大部分の科学には必要でもある」。しかし、本来区別されるべき拡がりのあるものとないもの、質と量などが混合され、誤った前提がたてられることになる。だからまず、彼はこの質と量を裁

断し、次にそれらを持続と空間に結び付けていく。こうした議論に対して、ベルクソンが持続に重きをおいて、空間を軽視しているかのように言われる場合があるが、そうではない。ヴォルムスによれば、空間は「実生活で役立ち」、「大部分の科学にとって必要」であるだけでなく、われわれの経験を支える条件でもある。また、持続と空間は純粋に概念装置として、あるいは理論としての機能を果すだけではない。この区分には実践的な射程があり、われわれの生そのものに介入してくるのだ。また、この二つの概念は、われわれ一人ひとりの経験における二つの極限値なのであり、われわれの生はこの二つの極、空間の側で語られる表層の自我と、持続の側で語られる深層の自我とのあいだを揺れ動いているのである。彼は以上のことを端的に「われわれは持続のなかで生き空間のなかで考えている」(p.88)といっている。したがって、われわれ一人ひとりの生には持続と空間という二つの異なる側面があるのであり、この意味で、生に二つの意味があると彼は解釈するのである。言い換えれば、持続と空間によって、生そのもの(la vie elle-même)、実践的生(la vie pratique)が、あるいは「われわれにとっての生」、「われわれにとっての経験」が可能となるのである。

次に、ベルクソン哲学における二つの動きについて示したい。これは本書において、「拡大運動」と「緊縮運動」といわれる二つの運動とつながっている。この二つの運動は、『試論』を「最初の一点」として、そこから出発して最後の著作である『思想と動くもの』、あるいは『二源泉』を最後の点とする、ベルクソン哲学全体の統一を示す際にヴォルムスが用いる語である。「拡大運動」とは、ベルクソンの四大主著を年代順に読んだ場合、『試論』から『二源泉』に至るまで、心理学、生物学、社会学と徐々に、彼の哲学の射程が拡がっていくことを示している。そして「緊縮運動」とは、『試論』で初めて語られる持続と空間の二元性が、どの著作の中にもでてくるということ、したがって、ベルクソンは自らの哲学の射程を拡げていくが、その都度最初の点にかえってくることを示している。最初の点とは、ヴォルムスの言葉を借りれば「最初の驚き、あるいは直観」(la surprise ou d'une intuition initiale)であって、持続と空間との区分を見出したことである。これら二つの運動でヴォルムスが示したいのは、持続と空間からはじまって、直観と表現、形而上学と科学、物質と精神といったこの種の二元性をとるということよりもむしろ、持続と空間の区分と統一の実在そのものを理解することである。

このことは、ベルクソンの最後の著作に注目することで明らかになるだろう。なぜなら最初と最後の点は「緊縮運動」として共通項があるはずであり、かつ「最後の点」は、ベルクソン哲学の射程がもっとも拡がっているはずだからである。この「最後の点」に関して、ヴォルムスは結論の中で、『二源泉』と『思想と動くもの』と「どちらがベルクソンの最後の著作か」と問うている(p.348)が、両著それぞれに別々の最後の点を見出している。第一に『思想と動くもの』に関しては、方法論上もっとも射程が拡がっており、それ

と同時に持続と空間の最初の区分をそこに見出せる。つまり、二つの極限値として示されるタームが合流し混合された場として生を思考することで、二元性をさらに強化した方向をとっている。それに対して『二源泉』は、実践（pratique）における生から出発する。両著の違いはヴォルムスに言わせれば、もっとも拡大した方法論と生である。しかしまた、持続と空間という最初の直観である二元性が現れている点で共通しており、ここに「最初の点」と「最後の点」との一致がみられることになる。

ベルクソンはいつも「われわれにとっての生」、「われわれにとっての経験」にかえってくる。彼によって立てられた極限値としての持続と空間という二つの区分は、各著作で見出され、そこに「緊縮運動」がある。他方で、自身の哲学の射程を拡げる「拡大運動」があり、この二つの運動はベルクソンの「二重の仕事」（une double tache）と呼ばれることになる。しかし、これら二元性はわれわれの経験において一致する。経験は持続と空間の区分が混合された場であり、この区分の混合なしではありえないからである。この経験に毎度たちかえりながら、問題を深めていく彼は、ヴォルムスにとって、行動する哲学者として描かれる。

最後に、評者は本書に対して一つの疑問を提示したい。ヴォルムスはわれわれ一人ひとりにとっての生、経験に着目し、ベルクソンの四大主著を読解している。その読解は生に空間も組み込まれ、二元論的に読まれてきたベルクソン読解に新たな観点を提示するものであった。また、四大主著を年代順に読解することで、ベルクソン哲学全体の有機的なつながりも提示している。しかしヴォルムスが中心に据えた、われわれ一人ひとりの生はベルクソン哲学において、それなしでは語られないものの、ベルクソン自身のいう生とはもっと拡がりのあるものではないのだろうか。生なき持続がない限り、われわれは持続のうちに生きるのである。その持続は『創造的進化』において、われわれ一人ひとりが現れる以前に実在していなければならない。時間と空間の区分はヴォルムスのいうとおり、生と経験の条件であることは間違いない。しかし、ベルクソンがわれわれの経験のみならず、その経験をはみ出す生を論じていることも事実である。したがって、われわれ一人ひとりにとっての生は、この広義の生、あるいは持続の先端に位置づけられ、「経験の曲がり角」を曲がって可能になるともいえる。そうだとすれば、本書のヴォルムスの議論をふまえつつ、広義の生を含んで、われわれ一人ひとりが実在することになる必然性を、今後、展開するべきだろう。

引用文献

- Bergson, Henri. *Oeuvre*, Paris: Presses Universitaires de France, 1991.
- Worms, Frédéric. *Bergson ou les deux sens de la vie*, Presses Universitaires de France, 2004.